

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00529

研究課題名（和文）現代アイスランド語の非人称構文の研究

研究課題名（英文）A study of impersonal constructions in Modern Icelandic

研究代表者

入江 浩司（Irie, Koji）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：40313621

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代アイスランド語の非人称構文を対象として行ったものである。言語データの主な収集方法として、研究代表者が構築したデータベースとアイスランドの研究機関で公開されているコーパスを利用した。アイスランド語の非人称述語をもつ表現について、主として次の4つの事柄に関する研究を行った：(1) 不定人称構文、(2) 受動進行形、(3) 対格主語をとる非人称動詞、(4) 属格主語をとる非人称動詞。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代アイスランド語の非人称構文をめぐる諸問題について、主としてコーパスを用いた用例調査を行なうことにより、先行研究で述べられている事柄の確認をするとともに、部分的にはあるが、これまで十分明らかではなかった細部の記述を精密にすることができた。

研究成果の概要（英文）：This is a study of the impersonal constructions in Modern Icelandic. As the main method of collecting linguistic data, we used a database constructed by the principal investigator and free online corpora hosted by a research institute in Iceland. Mainly the following four aspects were investigated: (1) indefinite-personal constructions, (2) the progressive passive construction, (3) impersonal verbs with an accusative subject, and (4) impersonal verbs with a genitive subject.

研究分野：言語学

キーワード：アイスランド語 非人称構文

1. 研究開始当初の背景

アイスランド語には非人称構文をとる動詞ないし動詞句が非常に多い。ここでいう非人称構文とは、動詞述語が常に3人称単数形で現れ、かつ、文中のいかなる名詞句とも呼応しないことを典型とする構文である。この言語には名詞類の形態論的な格が4つ(主格・対格・与格・属格)あり、先行研究(Barðdal 2004)によると、与格主語をとる動詞が約700個、対格主語をとる動詞が約200個、属格主語をとる動詞が10個ほどであるとされている。また、主語と見なされる名詞句が現れない述語も数多くある。本研究は、こうした現代アイスランド語の非人称述語をもつ表現を研究対象とした。

2. 研究の目的

本研究は、言語類型論的な立場から、現代アイスランド語の非人称動詞の記述の精密化を行うとともに、その事例研究から言語類型論における非人称構文の研究に新たな知見を提供することを目的とした。研究上の問として、(1) 主語の格形をめぐる問題、(2) 斜格主語の意味役割をめぐる問題、(3) 非人称構文の発達とアスペクトの関係、(4) 非人称構文の機能と形式の相関をめぐる問題、の4点を主として扱うことにした。

3. 研究の方法

言語データの収集方法としては、アイスランド語母語話者に対する聞き取り調査によるデータ収集と、文学作品や新聞等を材料とする文献データに基づく分析の両面から取り組む予定にしていた。しかし、世界的に広がったCOVID-19の影響により、海外における現地調査を実施することが困難となったため、もっぱら、文学作品や新聞等の文献調査をもとに研究代表者が作成したデータベースと、アイスランドの研究機関 The Árni Magnússon Institute for Icelandic Studies で公開されているコーパス(The Tagged Icelandic Corpus および The Icelandic Gigaword Corpus)を用いて研究を進めた。また、研究代表者が平行して取り組んでいる共同研究(JSPS 科研費17K02680)で構築したパラレルコーパスも利用した。

4. 研究成果

(1) 不定人称構文について(研究の目的4に関連)

現代アイスランド語の非人称構文のうち、名詞類の指示性の低下による非人称化の現象として、不定代名詞的用法の名詞類による不定人称構文の研究を行なった。まず、多言語のパラレルテキストが得られるサンテグジュペリ『星の王子さま』を分析対象として選び、原文におけるフランス語の不定代名詞 *on* がアイスランド語訳(およびフェーロー語訳)でどのような手段で翻訳されているかを調べた。その結果、アイスランド語の不定人称の名詞類として出現頻度が最も高いのは *maður* (普通名詞としては「人、男」の意味)の単数形で、次いでその複数形 *menn* であることが判明した。単数形と複数形は、同一文中で同一指示を行うために繰り返されるとき、単数形の場合は *maður* を繰り返し、複数形の場合は人称代名詞に置き換えて前方照応を行うという点で異なり、単数形の方が不定人称化の程度が進んでいると考えられる。この不定人称用法の *maður* 「人」の機能について、言語類型論的立場からヨーロッパ諸語における不定人称文を扱った先行研究を参考にして検討した。特に Gast & van der Auwera (2013) は、他の先行研究を統合し、事態と参与者の意味論的特性を組み合わせた意味地図を提案しており、本研究ではそれを用いてアイスランド語の不定代名詞用法の *maður* 「人」の単数形と複数形の機能的分布の違いを検討した。その結果、単数の *maður* は事実的または非事実的な事態で、全称的な参与者で参与者の内的視点を取る事柄で用いられ、複数の *mann* はそれに加えて事実的で特定の事態で、参与者について外的視点を取る事柄にも用いられることが判明した。

(2) 受動進行形について(研究の目的3,4に関連)

現代アイスランド語の非人称構文のうち、いわゆる受動進行形 *vera verið að* 不定法 の研究を行なった。主として参照した先行研究 Barðdal & Molnár (2003) では、アイスランド語の受動構文が、文頭位置への項の昇格の有無と動作性アスペクトの違いにより6種類に分類されているが、受動進行形については現在時制で受動構文が進行的意味で解釈されるには進行形の構文を取らなければならないと注記されているのみで、受動構文全体の中での位置づけが十分検討されていなかった。英語と同様の *be* 動詞+過去分詞 による受動構文は主格主語が現れるのに対し、受動進行形では主格成分が現れず、そもそも構造の大きく異なる構文である。受動進行形の性質を明らかにするために用法の実態を調査した。研究代表者が集めた新聞記事のコーパスの分析では、時制に関して、能動の進行形では現在時制と過去時制の出現頻度がおよそ3:1程度の比率であるのに対し、受動進行形では現在時制と過去時制の比率は9:1となり、過去時制で受動進行形の割合が大きく下がった。しかし、The Icelandic Gigaword Corpus を用いた調査では現在時制と過去時制の出現件数にそれほどの差がなかった(およそ5:4)。受動進行形に現れる動詞は対格ないし与格目的語をとる動詞と、前置詞つき目的語を取る動詞が多く、若干の自動詞も

現れていた。時制によって動詞の種類が特に異なるということはない。非人称受動文では vera + 過去分詞 という構造で、前置詞つき目的語をとる動詞と、いわゆる非能格自動詞が現れる構文の二つが代表的であり、いずれも動作主が抑制され、この点は受動進行形と共通しているが、完結相的か非完結相的かという点で異なっている。アイスランド語には過去時制で完結相的な捉え方をし、動作主を抑制する受動構文が欠けていたが、若い世代の話者が使ういわゆる新受動構文 vera + 過去分詞 + 定の目的語 はこの穴を埋めるように生じた可能性があると考えた。

(3) 対格主語をとる非人称動詞について (研究の目的 1, 2 に関連)

現代アイスランド語の非人称動詞のうち、対格主語をとるものを研究した。先行研究で報告されている約 50 個の該当する動詞についてコーパスによる調査を行い、対格主語の意味的特徴と、共起する成分の形態的・意味的特徴をもとに分類を試みた。複数の意味をもつ動詞もあるが、以下に大まかな分類と個数の上での分布を示す。

目的語をとる動詞は少ないが、対格目的語をとる動詞として、欠如を表す vanta「～を欠く」、skorta「～が足りない」、bresta「(言葉が)出てこない」、対格の同族目的語をとる動詞として dreyma「(夢を)夢見る」、属格目的語をとる動詞として iðra「～を後悔する」といった動詞があった。心理的な欠乏を表す動詞では、langa「～したい、欲しい」のように eftir「～の方へ」、í「～の中へ」、til「～の方向へ」といった前置詞を介して目的語をとるものが多いことがわかった。動詞の個数では以上で全体の 1/3 程度を占め、これらの動詞の主語は基本的に人間を表す。

目的語をとらない動詞では、主語の状態または位置の変化を表す動詞が多く、brjóta「割れる」、festa「固着する」、reka「流れ着く」といった例があり、こうした動詞においては主語は基本的に事物で、意味的に整合するなら人間を表す主語も現れる。人間を主語として、感覚の出現を表す動詞も多く、svima「目まいがする」、verkja「痛む」といった例がある。状態・位置の変化を表す動詞が全体の 1/4 程度、感覚の出現を表す動詞が全体の 1/5 程度の個数を占める。また、gruna「～ではないかと疑う」、minna「覚えている」といった人間の認識の状態を表す動詞が 6 個あった。なお、対格主語をとる動詞では、主語が意思をもつ動作主と解釈できるものは一つも見られなかった。

(4) 属格主語をとる非人称動詞について (研究の目的 1, 2 に関連)

現代アイスランド語の非人称動詞のうち、属格主語をとるものを研究した。属格主語をとる非人称動詞は非常に数が少なく、先行研究でも 7 個ほどしか報告されておらず、意味の面では「知覚できる、感じられる、推測される、考慮される」といった知覚や認識に関するものが多い。それらの動詞についてコーパス (The Tagged Icelandic Corpus) を利用し、動詞の共起成分を調査した。調査の結果、主語として解釈のできる属格名詞は大半が無生物で、また数としては属格の代名詞が多く、中でも後続の að 節 (英語の that 節に相当) を指す順行照応的な中性単数代名詞 (英語の it に相当) の属格形の出現が多かった。他の斜格主語をとる非人称動詞と同様に、主語が意思をもつ動作主として解釈できる例はなかった。

引用文献

- Barðdal, Jóhanna (2004) The Semantics of the Impersonal Construction in Icelandic, German and Faroese. In: Werner Abraham (ed.) *Topics of Germanic Typology*, 105–137. Akademie Verlag.
- Barðdal, Jóhanna & Veléria Molnár (2003) The passive in Icelandic - compared to Mainland Scandinavian. In: Jorunn Hetland and Veléria Molnár (eds.) *Structures of focus and grammatical relations*, 231–260. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Gast, Volker & Johan van der Auwera (2013) Towards a distributional typology of human impersonal pronouns, based on data from European languages. In: Dik Bakker & Martin Haspelmath (eds.) *Languages across boundaries: Studies in memory of Anna Siewierska*, 119–158. Berlin: De Gruyter.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 入江, 浩司	4. 巻 11
2. 論文標題 アイスランド語とフェロー語の不定人称文	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集. 言語・文学篇 = Studies and essays. Language and literature	6. 最初と最後の頁 79~94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00053973	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 入江浩司
2. 発表標題 アイスランド語の受動進行形について
3. 学会等名 第2回 金沢言語学フォーラム
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

金沢大学学術情報リポジトリ https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------